

越境する少子・高齢化

子どもと高齢者をめぐる日本とアジアの新しい潮流

2012年10月24日 和光大学ポブリホール鶴川

少子・高齢化は今世紀半ばにはアジアの新興諸国でも急速に進み、とりわけ、東アジアでは深刻化する。

2010年、東アジアの人口は約15.7億人。

うち高齢者は1.5億人だが、2050年には、

人口が15.1億人へ減少する一方で、高齢者は4億人へ増大し、

高齢者比率は26.5%に達する。

4人に1人以上が高齢者の「超高齢社会」が到来するのだ。

とくに日本は「団塊ジュニア」世代が高齢者の仲間入りをする

今世紀中ごろには、高齢化率は40%に達する。

100人中、高齢者が40人を占める社会とはどのような姿になるのか。

今後はアジア各国では日本の「高齢者雇用」や「女性の子育てと就業の両立」など、

人的資源活用策の成功と失敗が有効なお手本となる。

一方、日本はアジア各国が持つ伝統的社会的「相互扶助」の仕組みから学ぶ。

こうした少子高齢化対策の相互学習は、日本とアジアの新しい関係の萌芽ともいえるだろう。



講演 1：日本の人口構造の変化と経済社会

小峰隆夫 法政大学大学院政策創造研究科教授

講演 2：21世紀におけるフィリピンの高齢者—人口変動の課題と対策

バージリオ・アグイラ フィリピン・ラサール大学准教授

講演 3：アジアにおける高齢者の人権論の視点—フィリピンの人口動態を通して見る

エリアス・パトリアルカ フィリピン・ラサール大学教授

講演 4：インドネシア・マラン県の高齢化対策におけるコミュニティの役割

マスツリン・アディ・ウィジャヤ

インドネシア・地域福祉NGOドゥアファア・ムハンマディア代表

英語通訳：ロバート・リケット 所員／現代人間学部教授

インドネシア語通訳：バンバン・ルディアント 所員／経済経営学部教授

司会：加藤巖 所員／経済経営学部教授